



## 学校運営の基本方針

校長 須玉 研一

### 1 学校教育目標

考える 助け合う やりぬく

### 2 重点目標

知 育	自分の考えをもち、進んで学ぶ子
徳 育	友達を大切にし、なかよくする子
体 育	進んで体づくりに取り組む子

### 3 経営方針

一人一人の子どもの思いや願いを大切にし、子どもを中心に据えた教育

- 子ども：楽しい学級・学校、安全安心な学級・学校
- 保護者・地域：信頼できる学校、開かれた学校（敷居を低く）

#### (1) 目指す学校像

- ① 子どもも教職員も一人一人が人間として大切にされる場所を目指す。
  - ・学校は、子どもも教職員も共に成長を喜び合い、困難を分かち合ったりしながら支え合える場所であること。
  - ・学校は、子どもも教職員も安心・安全な場所であり、一人一人の居場所があること。
- ② 学校と保護者・地域が互いに信頼し合い、双方向の連携がなされる場所を目指す。
  - ・「地域の特色を生かし、地域とともに歩む学校づくり」のために、学校が社会に開かれた場所であること。（コミュニティスクールの推進）
  - ・学校、保護者、地域がそれぞれの役割を自覚し、互いに連携し合い、支え合う場所であること。（子ども、保護者、地域から信頼される学校づくり）

#### (2) 目指す教職員像

- ① 子どものことを第一に考える教職員であれ
  - ・常に子どもの成長を願い、子どもを信じ、子どもに寄り添いながら、教育活動の充実のために不断の努力を惜しまない。
- ② 子どもや保護者にとって良きモデルとなる教職員であれ
  - ・子どもや保護者は、本当に教師をよく見ている。常に、大人として、社会人として、粟生津小の教職員として、子どもにも保護者にも信頼される姿を見せる。
- ③ 互いに協力し合い、認め合い、高め合う同僚性のある教職員であれ
  - ・「チーム粟小」として、個々の力を結集して、諸課題に取り組んでいく教職員集団を作る。

### (3) 具体的な方策

#### ① 主体的・対話的に学ぶ意欲を育て、確かな学力の定着を図る。

ア 日々の授業を大切にし、校内・校外授業研修の充実を図る。

- ・日々の授業の中で、子どもたちが「分かった。」「できた。」と言える授業づくりを目指す。(知的な学級環境を作る)

- ・校内・校外研修を軸として、学習指導、授業力の向上を目指す。

イ 校外・地域に目を向け、保護者・地域と連携・協力できる体制づくりを行う。

- ・燕市や粟生津地域の学習教材となり得る素材を見いだし、積極的に学習に取り入れる。(長善館、歴史的文化財、地域企業の活用)

- ・ゲストティーチャーや学習ボランティアとして地域に協力を依頼し、保護者や地域に開かれた学習を展開する。(地域コーディネーターとの連携・活用)

#### ② 子ども同士の関わりを充実させ、信頼し合える関係を培う。

ア 全教職員で、全校85人の子どもたちを見守っていく。(全教職員が全校担任)

- ・子どもたち一人一人が安心・安全に過ごせる学級風土・環境を整える。(子どもの居場所づくり)

- ・一人一人の子どもの後ろには、必ず保護者がいることを考えた言動をする。

イ 特別活動の内容を充実させ、子どもの主体的・自主的な活動を支援する。

- ・子どもの主体性・自主性を育てるには、子どもに任せる勇気と時間が必要。

- ・学級としての横のつながりと異学年交流としての縦のつながりを深める。

#### ③ あきらめずに最後までやりぬく、たくましさを養う。

ア 身体を動かす機会を増やすと共に、運動の楽しさや喜びを味わわせる。

- ・運動の特性を理解し、楽しみながら運動に取り組める授業づくりを行う。

- ・休み時間も身体を動かすことができる子どもを増やし、体力の向上を目指す。

イ 家庭と連携し、望ましい生活習慣(適切なメディア利用)の確立を図る。

- ・自分自身の身体について知る機会を増やし、自律的な生活ができるよう支援する。

- ・適切なメディア利用ができるように、保護者に啓発すると共に、子どもと保護者が健康な生活を送るための正しい知識を学ぶ機会を設けていく。

#### ④ 特別な支援を要する子どもの特性を理解し、特別支援教育の充実を図る。

ア 特性を持つ子どもの個々の教育的ニーズを理解し、支援できる体制を作る。

- ・特別支援学級や通常学級における特性を持つ子どもについて、本人の困り感や保護者の考えを理解し、安心して学習できる教育環境を整える。(UDLの充実)

- ・特別支援学級と交流学級の子ども同士が、互いに理解し合い認め合える学級づくりを行う。

### (4) その他

#### ○ 「子どものために」を合い言葉に！！

- ・年齢も、経験年数も、力量も、考え方も違う人間だからこそ、違いを認め合い、「子どものために」に協働的な働きができる教職員集団でありたい。

- ・教職員の一人一人のギャップを埋めるのは、人間としての「のりしろ」である。